小中の綿密な連携で育む英語コミュニケーション能力

岐阜県多治見市立笠原中学校

これからの社会では、コミュニケーション能力育成がより重視される中、中学校の英語教育はどうあるべきなのか。今号は、10年前から小中が連携し、児童・生徒が聞く・話す必然性を感じさせる活動を取り入れながら英語教育を行ってきた学校事例を通して考える。

「Hello, everyone. Today's program is Kasahara Quiz Show! Are you ready?」

多治見市立笠原中学校1年C組の英語の授業は、木股純子先生の元気なあいさつで始まった。今日の課題はグループ対抗の学校に関するクイズ大会だ。チーム・ティーチングで入っていた松田洋和先生が、活動では eye-contact, gesture, reaction などが大切だと伝えた後、生徒はいっせいに動き出し、あちこちで英語が飛び交い始めた。

「How many twins in Kasa-chu?」と数を問うもの、「Do you know Mbika?」と学校活動の名称の意味を問うもの、校章の写真を示して「Where is this?」と尋ねるものなど、工夫を凝らしたクイズが並ぶ。回答者が正解に驚いたり、その表情に出題者が得意げな顔を見せたりして盛り上がる。活動の中盤、ALTが checking も大切と「OK?」「Do you understand?」などを紹介すると、さっそく使う生徒もいた。

最後の振り返りでは「Aくんが前よりも大きな声でクイズを出していました」など友だちの良かった点を発表する生徒もいて、皆、満足そうな表情で授業は終わった。

School Data

多治見市立笠原中学校

◎1947（昭和22）年開校。文部科学省の研究開発学校の指定を受け、笠原小学校と共に小中連携の外国語活動・教育の研究に取り組む。

校長 柴田哲也先生／**生徒数** 296人／**学級数** 10学級／**所在地** 〒507-0901 岐阜県多治見市笠原町2455-12／**TEL** 0572-43-4165

URL http://school.city.tajimi.lg.jp/j-kasahr/

コミュニケーションの喜びを感じられる授業

笠原町では一小一中という環境を生かし、2003年度に文部科学省「研究開発学校」の指定を受けて以降、小中連携の英語教育に取り組んできた。現在は幼稚園・保育所とも連携し、幼保は週1時間、小学1・2年生は週1時間、小学3～6年生は週2時間、中学生は週4時間、外国語活動または英語の授業を行っている。指導の軸は「笠原型コンテント・ベイスト」。他の教科や領域の既習内容を生かした素材を取り入れ、課題解決的な活動を行う。聞く・話す・（中学校では）読む・書く場面を必然的に生み出すと共に、活動の過程で驚きや発見があることによって、子どもがコミュニケーションの喜びを感じられるような授業づくりを心掛けている。

冒頭の「Kasahara Quiz Show」を例に説明しよう。これは、1年生の授業で、全23時間の13～18時間に当たり、単元目標は「学校紹介のビデオレターが制作できる」だ。同校では毎年11月に中部大の留学生を

Teachers

多治見市立笠原中学校
松田洋和
まつだ・ひろかず　2学年担任。英語科。「相手の気持ちを大切にする、心豊かな日本人を育てたい」

多治見市立笠原中学校
木股純子
きまた・じゅんこ　1学年副担任。英語科。小学校を兼務、6年生の外国語活動を担当。「人とかかわる大切さを感じられる学級づくり、授業づくりを心掛けている」

招いた国際交流を行っているが、留学生の参加者が年々減っているという課題があった。木股先生は、単元の最初の授業でその問題を提起。生徒が話し合った結果、ビデオレターで学校をアピールしようと意見がまとまった。その前段として、学校の良い点を探すためにグループ対抗のクイズ大会を行った。

「生徒は自分たちが見付けた良い点をなんとかクイズにしようと一生懸命です。ですから、単元に含まれていない単語や文法でも、生徒が使いたいと思ったタイミングを逃さずに、言語材料を与えることを大切にしています。必要な時に必要な言葉を与えると、生徒はすーっと吸収していきます」（木股先生）

2学年担当の松田先生もこう話す。

「2年生で行ったロボット開発をテーマにした授業では、社長役のALTへのプレゼンテーションが目標でした。説得力のある内容にしようとデータなどを盛り込んだレポートを英語で作成しました。多くの生徒が苦手とする書く活動でも、必然性を感じると真剣に取り組みます」

写真　クイズ大会は6グループの対抗戦。クイズを記したボードには写真やイラストも多用し、分かりやすく表現。生徒は、出題者や回答者が1人に固定しないよう、互いに発言を促していた

小学校での活動を知識として定着させる

生徒の英語活動が活発なのは、小中連携の影響も大きい。実は、木股先生は12年度までの3年間、笠原小学校に勤務していた。つまり、今の中1生を小6で指導し、生徒と共に中学校に異動してきた。松田先生は、木股先生の授業についてこう話す。

「今年の1年生は、昨年の1年生以上に英語活動に積極的です。木股先生が生徒の学習歴や意識を理解し、それらを大切にした授業づくりをしているからこそ、あれだけ生徒が意欲的なのだと思います。中学校側が小学校での指導を大切にすることが重要なのだと改めて感じています」

小中はこれまでも英語教育交流会（2カ月に1回）などで情報を共有してきた。それを一歩進めて、12年度から小中の兼任教師を1人置き、小学校での指導をいかに中学校に引き継ぐかも研究している。

「単元計画では、小学校での既習事項をいかに生かして定着させるかを意識しています。授業では、小学校での外国語活動を引き合いに出し、『あの時に出てきた言葉だよね』などと言って生徒に思い出させ、系統立てて説明し、体験が知識として定着するように指導しています」（木股先生）

「am, are, is は別々なものだと思っていたが、be動詞という1つの仲間だと分かってすっきりした」と振り返りシートに書いた生徒がいた。小学校で英語に十分親しんでいる分、中学校では適切なタイミングで既習事項を整理し、体系的に理解できるよう指導することが重要だと、同校は考える。

「生徒は、自分の考えを英語で発信する活動を小学1年生から積み重ねてきています。そうした中で、伝え合う、理解し合うという相互関係が築かれ、話す態度や聞く態度がきちんと身に付いています。そうした生徒の姿を見ていると、英語の素地を養っておくというのは、こういうことなのだと実感します」と、木股先生は話す。

笠原町は外国人が多い地域ではなく、街で外国人と会うことはほとんどない。ALTも1人なので、授業中に生徒全員と話せるわけではない。それでも生徒はジェスチャーを交えながらクイズを出し、表情豊かに英語で答える。国際交流の日に大勢の留学生が来てくれるよう願ってビデオレターをつくる――。コミュニケーション手段としての英語を指導する1つの方向性を同校の取り組みが示唆している。